

平成 30 年度 第3回未来創造セミナー

「SDGs からみる未来のまちづくり～イノベーション(技術革新)から SDGs を考える～」実績報告

1. 開催日時:平成 30 年 9 月 11 日(火) 13 時 30 分から 15 時 30 分
2. テーマ:「SDGs からみる未来のまちづくり～イノベーション(技術革新)から SDGs を考える～」
3. 話題提供者:
建山 和由 氏(立命館大学工学部教授、EDGE+R プログラム統括責任者)
4. グループディスカッション
日常の活動を SDGs の視点でみてみよう。
5. 開催場所:UDCBK
6. スケジュール
13 時 30 分～14 時 40 分
話題提供 「SDGs からみる未来のまちづくり イノベーションと SDGs」
「BKC Sustainable Week」
14 時 40 分～15 時 30 分
グループディスカッション 日常の活動を SDGs の視点でみてみよう。
7. 参加人数:23名
8. 報告
(1) SDGsの特徴

まず建山先生から、SDGs(エスディーゼズ)とは Sustainable Development Goals(サステイナブル デベロップメント ゴールズ)の略で、「持続可能な開発目標」という意味であること、国際連合において 2030 年までに達成すべき目標として 17 のゴールと 169 のターゲットが設定されたことの説明があった。

SDGs には、「目標が明確」であり、わかりやすい、ゴール毎のロゴがあり、「世界の共通語になる」、この結果、多様な人々との「連携が生まれ易い」、一方で、「理念は明確だが、実際に何をすれば良いのかわからない」という特徴があること、このことがイノベーションを起こす要因となっていることを話された。

立命館大学では、昨年度(2017 年)、後ほど説明のあるイノベーション・アーキテクト養

成プログラム(EDGE(エッジ)プログラム)を受講している学生たちが、キャンパスをひとつの地球に見立て、キャンパス SDGs「Sustainable Week」を企画・実施した。エッジプログラムを受講したから、学生が「Sustainable Week」を企画したのではなく、もともとそのような素養のある学生がエッジプログラムを受講したともいえるが、いずれにしるエッジプログラムの受講経験が活かされたと思われることを話された。

建山先生から、エッジプログラムの詳細については後ほど説明するので、まずは「Sustainable Week」の紹介と開催に至るプロセスについて実行委員を務めた生命科学部の上田君のお話しをお聞きすることとした。

(2) BKC Sustainable Week 紹介・開催に至るプロセス

上田君より次のようなお話をいただいた。

● Sustainable Week 2018

今年度は10月14日から16日の3日間に集中して実施予定。テーマは「we are SDGs leaders,」である。それぞれのイベントのリーダーは前に「Sustainable Week」、背中に「SDGs Leader」と書いたTシャツを着ており、みんなが集まれば「Leaders」になる趣向。わたしたちBKCの学生がこれからのSDGsのリーダーになる意気込みを表わしている。

● Sustainable Week とは

日本初、学生主催によるSDGsの体験型イベントである。名称が独り歩きするよう当時はまださほど浸透していなかったSDGsではなく、Sustainable Weekとした。後ほど建山先生から説明があると思うが、デザインドリブン・イノベーションの考え方を踏まえ、立命館のびわこ・くさつキャンパス(BKC)を“小さな地球”と見立て、学生に対しては、「持続可能性について深く考え、自己表現する機会の提供」、社会に向けては、「大学キャンパスからの社会課題解決に向けた提言」、大学は「時代、社会、人の変化に対応できるサステイナブル(持続可能な)キャンパスの実現」を目標とした。

具体的には、大学で活動している様々な学生団体個々にSDGsの17のゴールを割り当て、それぞれのゴールに則した企画内容を考えてもらい、実施した。

またSDGsの17のゴールは、上から順に「経済」、「社会」、「環境」の3階層のウェディングケーキに例えられる。最下層の「環境」が達成されなければ、次の「社会」は機能せず、最上層の「経済」は持続しない関係にある。学生団体それぞれをその活動内容にあわせ、3階層に分類することにより、階層ごとの連帯と階層間のつながりを認識できるようにした。28団体約700名が参加したイベントとなった。当日はキャンパス内に大看板を設置した。

主な企画として、「4 質の高い教育をみんなに」では気球搭乗体験を実施。キャンパスのグラウンドを使用するための諸手続きに苦労した。「5 ジェンダー平等を実現しよう」は団体が2人だけだったが、市民のみなさんの協力を得て、当日は200人の参加があった。0円食堂は3団体が協力して、3つのゴールにあわせて、カレーを作った。「2 飢餓をゼロに」では売れ残り野菜を用いた野菜をカレーの材料にした。「12 つくる責任 つかう責任」では

再利用可能な容器を、「15 陸の豊かさも守ろう」では、有機栽培の野菜を提供した。

今年度は本番に向けて、「SDGsを知る」、「SDGsを伝える」、「SDGsを考える」と付属高校生を対象にSDGsと自らの学びについての座談会を実施するなど本番に向けて段階的にコミットメントを深める工夫をしている。

2015年9月に国連でSDGsは採択され、ルールが決まり、欧米諸国は、企業や行政が中心となり、モデルづくりに取組始めている。その流れにあわせ、2016年11月に立命館地球環境委員会、2017年1月に滋賀県が都道府県初のSDGs参画を表明するなど“持続可能性”に向けた取組が始まったことから、学生としてもモデルづくりに取組もうとSustainable Weekを企画した。

● SDGsの課題と成功モデルづくりへの取組

現在のSDGsの課題は、課題が多すぎて自分たちの課題が見えないこと、先進国の関心が低いが、果たして若い世代の関心はどこにあるのか、そしてなによりも成功モデル、お手本がないということ。

若い世代は本当に関心がないのか大学生の意識調査をしたところ、70%以上の学生が社会問題に関心があるが、考える機会や解決する機会がある学生は約16%に留まり、約30%の学生が「機会がない」と回答している。

そこで、エッジプログラムで学んだデザイン・シンキングやデザインドリブン・イノベーションの手法を参考に、Sustainable Weekを企画した。

課題が多すぎて自分たちの課題が見えないことについてデザイン・シンキングとデザインドリブン・イノベーションのふたつの手法を試した。

デザイン・シンキングは、目の前にいる人間の行動を起点に、共に行動しながら、現場の状況を掴み、思いついたアイデアを出し合い、みんなで議論し、素早く試作して試してみる、そして、また観察して理解を深め、アイデアをだしあい・・・を繰り返していく手法である。マイボトルプロジェクトやストックホルム視察などを実施した。

デザインドリブン・イノベーションは意味のイノベーション(読み替え)である。立命館大学は茨木市に新しいキャンパス(OIC)をつくり、BKCから経営学部が移転した。OICのキャンパスは公園と隣接するなど開かれたキャンパスであり、デザインによって急進的に大学の意味を変えた。一方、BKCでは女子学生が減るといった大きな変化が起こったが、プールなどが出来たとはいえ、変化は漸進的であった。学園祭のあり方も学生の自己満足にすぎなかったことから、SDGsの学園祭と定義し直し、さらにキャンパスを“小さな地球”と見立て、SDGsのゴールを学生の既存の活動と結び付けることによって学生の活動に新たな意味を付与した。これにより、自分たちの趣味的な活動が社会的価値を持ち始め、そこから新たな活動が生まれた。

Sustainable Weekは、このようにエッジプログラムの受講生が中心となり、学んだことを実践しながら、自ら課題を見つけ、次世代のリーダーを次々と生み出す土壌づくりであり、増殖型SDGsエコシステムである。

- 企業との連携

企業と連携することも積極的に取り組んでいる。例えば、企業が取り組む5つのSDGsのゴールに関連した企画のスタンプラリーを行い、完走したら、企業の商品を景品として提供、異なるゴールの企画であるロボット操縦体験に成功したら、景品として企業の商品を提供するなど実現した。その他、SDGsに取り組んでいる企業と連携し、1泊2日のワークショップを開催し、Sustainable Week2018で実施する企画を考えてもらった。草津市賞も設けていただいた。

現在、Web上に自分が実現したい2030年の姿を創り出す人材育成のためのコミュニティサロン「仮想地球市民会議」を立ち上げた。

これからもSDGs達成のためにイノベーションを起こしていきたい。

上田君の説明のあと、建山先生より、Sustainable Week 実現上の課題として、次の6点をあげられた。

- ① 実施しようとする発想
- ② 行動を一にする仲間づくり
- ③ 全体構想の立案
- ④ 17の各テーマのアイデア出しと協力者の確保
- ⑤ 全体のマネジメント
- ⑥ 広報、周りへの浸透

そして、学生たちはこの6つの課題を克服し、イベントを成功させた。このような素養の育成には、学校教育も変わっていかなければならない。

実行委員会の学生のほとんどがエッジプログラムの受講生であるが、もともと熱意のある学生がエッジプログラムを受講したともいえるが、SDGsのような答えのない課題の解決には、熱意だけではなく、社会に新しい流れをつくるための知識や手法など素養のある人材(イノベーション・アーキテクト)の養成が必要である。

(3) イノベーション・アーキテクト養成プログラム(エッジプログラム)の必要性

- イノベーション・アーキテクトとは？

社会に新しい流れ、イノベーションをデザインして創りあげる人材である。具体的には物事を俯瞰し、本質を認識できる俯瞰力、物事を体系的にまとめあげる構造化力、課題解決までの道のりを構成・デザインする構想力、チーム形成力、チームワーキング力、世界的な視点で多様性の価値を認めあえるマインド(グローバルダイバシティマインド)の5つの能力と1つのマインドを持つ人材である。

イノベーションを生み出すには、同種の人の集まりより、多様な人の集まりの方が知識と経験の範囲が圧倒的に広まるため、本プログラムは学内だけではなく、学外や社会人まで門戸を広げた。エッジプログラムは文部科学省の公募事業であり、文部科学省は当初技術系の大学院生・若手研究者・ポスドク等を対象として考えていたが、同種の優秀な人材ばかり

になり、イノベーションを起こすようなアイデアはでなかった。

- なぜ、いま、イノベーションが求められるのか？

成長社会から安定社会となり、決められたことを誠実にしっかりとこなす人材ではなく、社会に新しい流れを創る人が求められるようになった。成長社会の教育は、成績(GPA)が高い学生を育てることであったが、安定社会では大学の成績(GPA の評価)だけでは評価していないことがわかった。企業の採用選考では、志や熱意、今までの経験と信頼関係、社会で活躍する力量など学びの基礎的素養を評価するが、学生はアルバイトの経験を語り、大学での学びを語る学生が少ないことがわかった。GPA よりも学びの基礎的素養が高い学生の方が評価される時代となった。

今までの大学教育は GPA の低い学生をターゲットにしてきたが、これからは GPA 中・上位層を対象にした評価困難な学びの基礎的素養を高める教育が必要となった。

大学ではこのような GPA 中・上位層の学生の多様なニーズに応えるため、様々な支援メニューを準備している。特に成長支援型奨学金・助成金は、個人や小集団の新たな学びに対して助成金をだす取組であり、ここからアフリカの少女たちの教育機会を増やすため、現地の生地を買い取り、日本で加工して販売した利益を現地に送る「アフリカの少女の夢を！日本の私たちに気づきを」など様々な活動が生まれた。成長支援型奨学金・助成金は自己評価ではあるが、一定の効果をあげている。

教育行政も今までは文部科学省のみであったが、経済産業省も社会を変えるようなチェンジメイカーをいかにして育てるかを検討し始めている。

経済産業省の第3回「未来の教室」とEdTeck 研究会資料では、「チェンジメイカーの資質」として、「「50センチ革命」を起こす力 身の回りの小さな気づきから変化への「最初の一步」を踏み出し、実現する力」と定義し、「圧倒的な当事者意識(志)」、「遊び心(プレイフルネス)」、「自信／自己効力感／自己肯定感(コンフィデンス)」、「果敢な失敗と回復力(レジリエンス)」などをあげている。

AI(人工知能)の普及に伴い、産業や社会構造が急激に変化し、自分自身でこれからの仕事を探し出さなければならない時代となり、従来の GPA 教育に変わるイノベーションマインド(社会に新しい流れを作ろうとする心意気)・アントレプレナー(起業家)教育の重要性が増してくる。

- 大学の取組

新しい教育に対応するため、エッジプログラムでは、

- ・イノベーションを起こす手法を実践的に学ぶデュアル・デザイン・スコープ・プログラム
- ・“現場”に触れ課題発見力の向上を狙うフィールド・ベースド・デザイン・プログラム
- ・関西地域全体で女性アントレプレナー率向上を目指すウィメン・アントレプレナー・コンパス・プログラム、の3つのプログラムを設けている。

デュアル・デザイン・スコープ・プログラムは問題解決志向のイノベーションを目指すデザイン思考コースと意味のイノベーション／急進的イノベーションを目指すデザインドリブンイノベー

ションコースの2コースである。そして、学びの成果を起業するためのさらなる一歩を後押しするビジネス・スプラウト・プログラムがある。

このプログラムの目的は、将来、社会に新しい流れを作るマインドを養ってもらうとともにその実現に向けて動き出す経験をすることであり、起業数を求めることはせず、将来に向けて、学生の可能性を引き出すことである。

(4) SDGsとベンチャー・イノベーション

SDGsは、これまでにない新しい取組であり、理念は示されているが、具体的な取組はこれから世界中で自由に描かれていく。17のテーマに対する取組内容や推進方法は一から自分で考えて、組み立てなければならない。「少しでも前に進める」、「持続的な活動にする」が成り立つアプローチをしなければならない。

一方、何も無い白地のキャンパスにイノベーションを描くことは難しい。ある程度の思考の補助線は必要である。

SDGsという緩やかで幅広く薄い補助線をガイドに、“現場”にでて観察しながら、解決策を考え、素早く何度も何度も試行錯誤を繰り返しながら、徐々に社会に新しい流れを作るデザイン思考、既存の活動の文脈を変えることによって新しい意味を与え、社会を急進的に変えるデザインドリブン・イノベーションという異なる二つの手法を組み合わせながら、社会にイノベーションをもたらすことができる。

2020年までの10年は「自分を超越る、未来を創る」であるが、2030年の次の10年は「挑戦をもっと自由に」である。

SDGsをイノベーションの補助線にこれからも挑戦を続けていくことが重要である。

9. ディスカッション

ディスカッションのファシリテーターはUDCBKの溝内が担当した。

建山先生からはSDGsがイノベーションを考える上での適度な補助線になること、そして、デザイン思考とデザインドリブン・イノベーションという異なる二つのアプローチを組み合わせることでSDGsを推進することによって、社会にイノベーションをもたらすことができることを、これからの大学教育に求められることという文脈で説明いただいた。

上田君は、デザイン思考とデザインドリブン・イノベーションの手法を活用したSDGsの取組みとして、Sustainable Weekを説明いただいた。具体的には、デザインドリブン・イノベーションの考え方を援用して、キャンパスを“小さな地球”に見立て、学園祭や大学のあり方を急進的に読み替えた。それにより、従来の学生の活動にSDGsという大義を与え、そこからデザイン思考によって、自分たちの活動とSDGsの17のテーマとの関係を考え、企画を作り、実施した。

そこで、みなさんの日常的な活動を、SDGsのどのテーマと関連するか、またSDGsの17のテーマはそれぞれ「経済」「社会」「環境」の3階層に分類されるが、自分が経済活動とみ

なしていた社会活動や環境活動という文脈に埋め込んだ場合、どんな新たな意味が付与できるかを考えていただきたい。時間が短いこともあるが、答えをだそうとしないで、自由に議論してもらって、デザイン思考やデザインドリブン・イノベーションという考え方に触れていただきたい。

1. グループ1

経済団体、銀行、行政のグループで、実際に SDGs に取り組んでいる人が中心であったため、SDGs の進め方が議論になった。SDGs はテーマが各方面にわたるからこそ、行政がイニシアティブをもって進めないといけませんが、テーマが各方面にわたっていることから、行政の縦割りで逆に動かなくなっている。企業から行政に働きかけても、担当ではないと断れる。

2. グループ2

行政、大学教員、学生のグループ。

自分は自転車のブレーキシステムを研究している。デザインドリブン・イノベーション的に意味を読み替えると、自転車を移動手段ではなく、情報収集手段であり、様々なセンサーで道路の状況などを収集し、今後の快適な歩行空間を創るためのデータを提供する。SDGs は「経済」「社会」「環境」の三階層で構成されている。違う文脈に埋め込むと「経済」ではレンタサイクル、「環境」では自転車の利用増による自動車排気ガスの減少による「環境」、自転車事故を減らせるということで「社会」に関係する。

3. グループ3

行政関係や県外の人もいるグループ。

「エシカル」という言葉を初めて聞いた。「道徳」とか「倫理」という意味だそうだ。

食品ロスをなくすことは SDGs のテーマでは12の「つくる責任」にあたる。

Sustainable Week 2018 のイベントにも参加し、SDGs について勉強しているが、水道など自治体で当たり前に行っていることが SDGs に当てはまることがわかった。

4. グループ4

地域の課題を IT で解決する団体や草津のお土産を作る活動をしている人や学生たちで構成されたグループ。

それぞれの活動に共通した目標は「情報格差を無くす」であり、SDGs のテーマでは10の「人や国の不平等をなくそう」にあたる。なんでもひとりでするのではなく、仲間を増やすことから、テーマ17の「パートナーシップで目標を達成しよう」も当てはまる。

10. まとめ

UDCBKのコンセプトは、「地域を知る、互いを知る」、「未来のイメージの共有」、「新たな活動の創出」の3つです。「未来のイメージの共有」はたったひとつの未来のイメージを共有するのではなく、様々な未来のイメージがあることを共有することです。

具体的には、「地域を知る、互いを知る」をテーマに地元の歴史を学び、地域の活動を知るとともに参加者間でお互いを知りあうために対話の時間を設けています。また「未来のイメージを共有する」ために、統計情報やIoTの進化などにより未来がどうなるかを議論しました。このようなセミナーを繰り返しながら、それぞれのセミナーで知り合った人々が「新たな活動を創出」するために自発的にグループを形成し、各々が参加したセミナーでの議論を踏まえ、新しい社会の流れを作るためのアイデアを一緒に考え、アイデア実現のための調査研究や社会に実装するための社会実験を行っていくことを目指していますが、新たな活動を創出するグループの形成には至っていません。

そのとき、エッジプログラムを受講してイノベーションの起こし方を学んだ学生たちがSDGsの考え方を活用して、Sustainable Weekという活動を生み出したことを知り、今回のセミナーを企画しました。建山先生、上田さんのお話をお伺いし、SDGsという考え方を補助線に、未来のまちづくりを考えることが有効であることがわかりました。

UDCBKでも、今回のセミナーを参考に、SDGsを補助線に、デザイン思考、デザインドリブン・イノベーションという異なる二つの手法を組み合わせ、社会の新たな流れを作りだしていくことを検討していきたいと考えています。

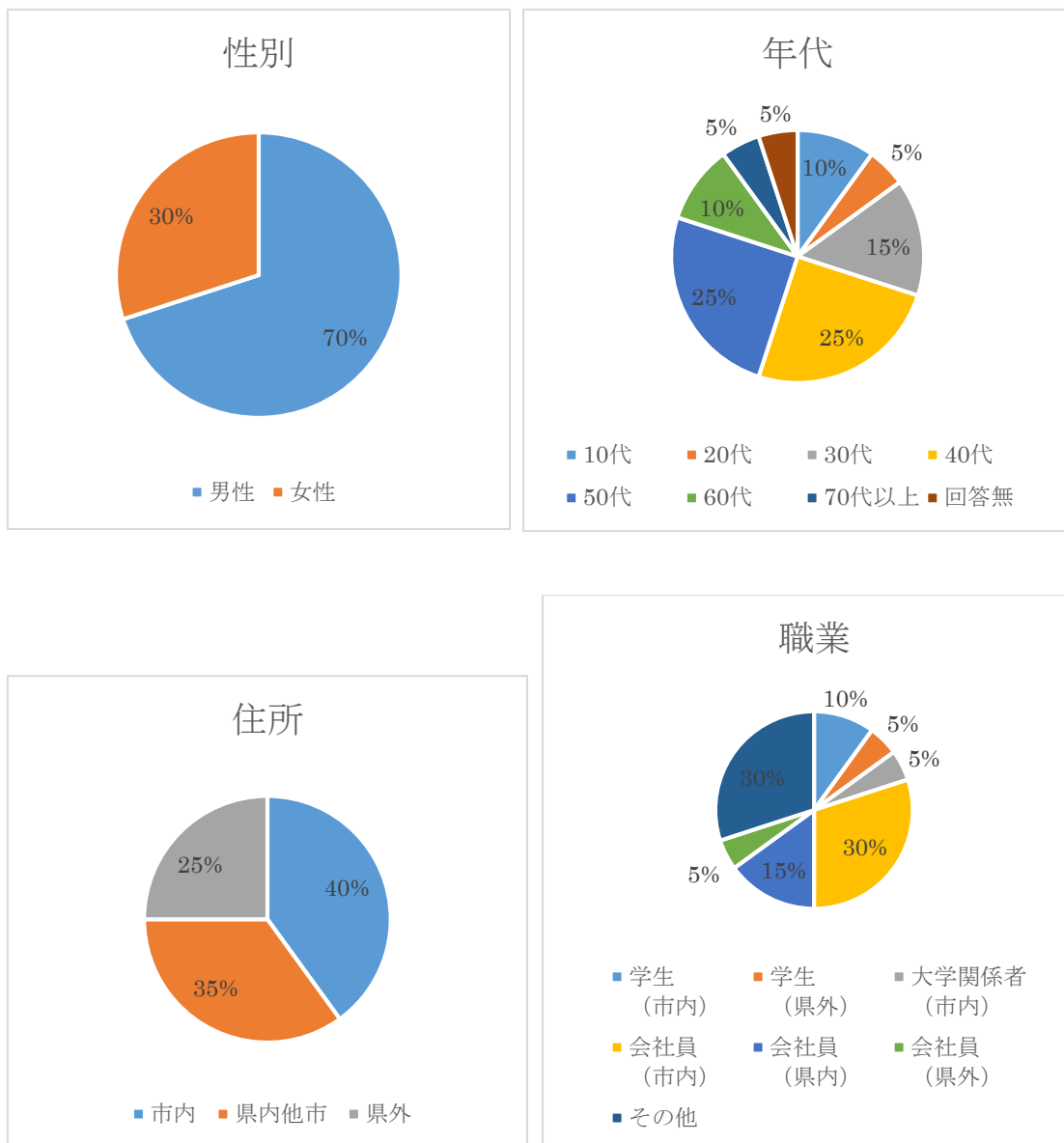
第1回は大学のSDGsの取組とこれからのまちづくりにはイノベーションを起こす人材が必要なこと、その人材を育てるプログラムについて、そしてSDGsの考え方がイノベーションを考える上での補助線となりうることの理論的根拠をお話いただきました。

第2回として、都道府県で初めてSDGsに取り組むことを宣言した滋賀県の取組を、そして、第3回として、地銀で初めてSDGs宣言を行った滋賀銀行の取組をお話いただく予定です。大学、行政、企業の取組を参考に産学公民連携のプラットフォームとしてSDGsを活用したUDCBKとして何ができるかを考えていく予定です。

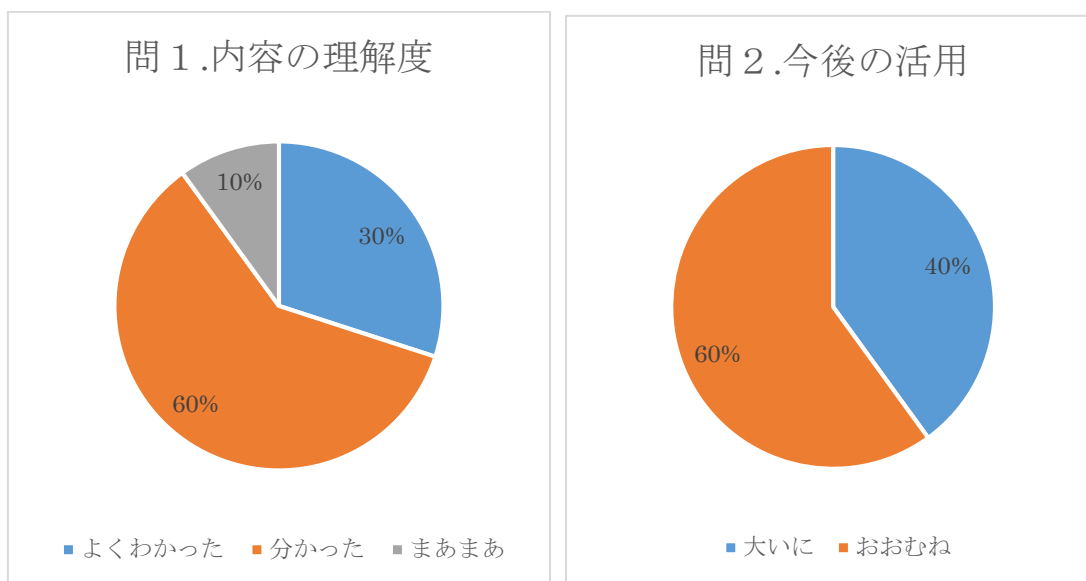
11. アンケート結果

参加者 23 名のうち、アンケートに回答していただいた方は 20 名でした。アンケート回答率は 87%です。

(1) 参加者属性



(2) セミナーの内容について



(3) 内容に関する主な自由回答

- 大変興味深い内容で、自分もこれからの生活の中でどうしていくか、ワクワクを大切にしながら、考え活動を継続したいと思いました。
- SDGsについて詳しく知ることができ、それを実際にグループワークで活かすという実践形式のセミナーはなかなか無いと思うのでとても感心した。
- 最近、いつも思うことですが、ワークショップの時間が短いので、発表内容も形だけのよう気がして不完全燃焼です。あと30分伸ばせませんか？ワークショップありのセミナーであれば。
- まちづくりの面からSDGsをどう考えるのかという事で参加して、いろいろと知識がひろげられた。
- まちづくり、というよりもひとづくりの話だと思った。おもしろかった。
- 1つの机で知り合った人とのディスカッションはとても面白かった。
- ディスカッションの時間がもう少し欲しかった。ありがとうございました。
- 色々な人との交流、楽しかった。
- 関わりがなかったが共感できる考え方をもつ人と知り合えてよかった。
- SDGsが市内でどう扱われるかこれからは楽しみだが、発想が古い人が多いので何か考え方を示す人がいるのではないかな。

以上